

東欧行政視察記

へその二

国情の違い まざまざ

横芝町長 佐瀬 哲司

国際金融都市

フランクフルト

現地時間（モスクワ）十七時十分再び機上へ、三時間程で第一の目的地西ドイツのフランクフルト空港へ到着した。

モスクワとの時差が二時間とのことで、午後二時に時計を合わせると、時差ボケでもう時間に対する感覚がなくなってしまう。

この空港へは四年前に一度降りているので懐しく思ったが、ヨーロッパではフランスのドゴール空港につく規模で、世界航空路の十字路として、発着数も一日八百便と、成田の四〜五倍もあり、自由主義国西ドイツらしい華やかさと活気を帯びていた。

また外気も十六度と、日本と余り差はなく初夏のような良い気候であった。

この空港の所在するフランクフルト市は、第二次世界大戦で重要な施設建物の八十パーセントが破壊されたが、今ではすっかり近代

的な高層ビルに変容している。

またこの都市は金融市場の中心地でもあり、ドイツ国立銀行をはじめ三百以上の国内、国外の金融機関が置かれてあり、有名な証券取引所もある。

すばらしい

道路環境

空港からは待ちうけていた大型

バスで高速道路に入る。大空港の所在地だけに道路網もすばらしく整備が行き届いている。

この道路は六車線だが、道路の両側には槐やアカシヤ、プラタナスの街路樹が整然と植えられ、さらにその外側には白樺や赤松をまるで林のように植え込み、公園化しているのがひときわ目につき、雑然とした日本の道路事情との差をはっきりと見せつけられた。

三十分程で宿泊ホテルへ入る。夕食の内容はあまり美味ではなくこの国の主食である馬鈴薯を多く用いていた。

夕食後商店街を散策して廻った。商店のほとんどは夜間は閉めてあるが、ウインドーは商品を電気照明で飾りつけしてあり、ユー

ロッパ全般がそうであるように、この国の人も、夜のウインドショッピングを楽しむ習慣のようだった。

またこの国の高級車であるベンツは余り見受けられず、日本車も少なかった。

翌日（第二日・八日）は、ブルガリアに発つまでのわずかな時間を利用して、在独八年という日本女性のガイドで市内見学をした。

高雅な雰囲気

ゲーテの家

土曜日のため市役所の勤務は休みであったが、一五二年以来この地でドイツ王が選ばれ、一五六二年から一七九二年にかけて大聖堂において神聖ローマ帝国皇帝の戴冠式が行われ、その祝宴が開かれたという旧庁舎には、皇帝の肖像画が五十二枚も飾られていた。

またこの地には、初の国民議会が開かれたという聖パウロ教会や聖ニコライ教会等、多くの歴史を秘めた貴重な建築物があった。

とりわけ観光客の目をひくものに、世界的に偉大な詩人ゲーテの家があり、彼自身の使用した家具調度品の数々が昔のままに保存され、高雅な雰囲気をかもしだしていた。

見学の後、全員で三越百貨店にショッピングに出かけた。

百貨店といっても十坪ぐらいの小さな店で、洋品や革製品、装飾品等が置いてある程度で、ヨーロッパには我が国のデパートやスーパーのような大型店はあまり見受けられなかった。

共産圏

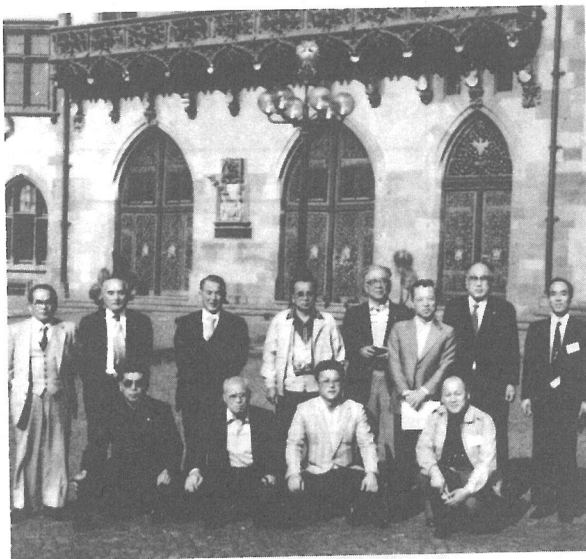
ブルガリアへ

フランクフルト空港へ戻り、現地時間午後二時、ブルガリア航空機で首都ソフィアへ向かう。

この飛行機はソ連製で、定員は七、八十名の小型機だが満席であった。

気流の変化が激しく気候が変りやすいとのことで、防寒具を用意している者もいた。離陸後四十分程で大雲海に入った。恐らくアルプスの山越えのためであろう。二時間飛行して午後四時にこの国の首都ソフィア空港に着陸した。この飛行機は二階建ての古びた建物で、まるでローカル空港のようであった。

電灯もつけずに暗いありさまはいかにも共産圏といった感じであったが、ロビーの片隅にある小さな売店には申し訳程度の品物しかなく、この国の経済がいかに貧困であるか、入国第一歩で感じとった。税関検査、入国手続等非常に時間がかかり、係官も感じが悪く、能率の悪さを痛感した。一つづく



西ドイツのフランクフルト市役所前